

# ブック・ビオトープ (音信不通 ③)

奈良 敏行



ビオトープは、バイオ(生命)とトポス(場所)の二つのことばを含む。主に生き物の暮らしやすい小さな空間を意味する。ごく小規模の生態系だ。生き物が単体で暮らすのではなく、共生的に影響を与え合っているというところが興味深い。

単に生態系といわず、ビオトープというのは、失われやすいフラジイルな限界性が、そこに顕著に感じられるからだ。放っておくといずれ消滅しかねない。

個性的な存在は、個性的であるゆえに、生きること自体に在でないくらいがある。強さは画一的で脆弱さには多様性がみられる。弱さの中にこそ個性の多様性がある。本が好

きということ、そのような個性の多様性として思い浮かべる。

ビオトープは生き物の生態についての用語だが、結川真悟さんが、国会図書館からたぐさんの資料を持ち帰ってくれた中に、「メディア・ビオトープ」という概念があった。結川さんは大きな公共のメディアで仕事されるので、つながり合う小さなメディアに刺激を受けるのだろう。

わたしは、本が好きな「人のトポス」と重ね合わせ、本を媒介にするところに生まれるビオトープに、もう少し鮮明なかたちを与えようと、ブック・ビオトープということばをあてはめてみた。本のうしろには人がいるので、人のビオトープという物語でもある。

ブック・ビオトープということばは、まだかたちに成り得ないものを語るものだから、当然辞書にはない。かわりにブックシシュということばがあった。本好き。書物に凝った。堅苦しい。机上の。非実地的な。書物で知っているだけ。机上の借景。そんな説明がとびだしてくる。そういえば、この冊子自体が借景ならぬ「見立て」からはじまろうとしている。

ビオトープにおいて、そこに一本の木があるということは大切な始まりだ。人の集まりは、とにかくやるという意思をもつ三人がいつづけければ持続する。それが一本の木

だ。「意思」と「見立て」の二つが必要だ。ブッキッシュの集まりの中心には「本」という光源がある。

本のビオトープを「秘密基地」と呼んでみよう。これも見立てだ。秘密基地は自分の好きなものだけにとり囲まれる空間だ。実際の生活の場所は雑多にすぎず。自分を見失ってしまう。だから、ブッキッシュな人間はときどき秘密基地にこもり、ここから出撃する必要がある。たとえば、空き地に土管がころがりそこに個々の秘密基地があり、ときおり顔をだして遊ぶ、という風景はもうないだろうか。そんな多孔性もビオトープの重要な要素だ。落ち込んだすき間とすき間が、でもつながりあっていた、ということだ。

ブッキッシュという習性も、この土管のようなものだ。日が暮ればこどもたちは家に帰る。それが秘密基地なのだ。本にとりつかれるという行為も日常のなかの「孔」のようなものだ。暮れても帰らず、この孔(アナ)を突き抜ければ本屋空間がぼつかりと広がる。この光源を本屋の青空とよんだこともある。ブッキッシュな言い方だが、天空の音楽が鳴り響いてはいないだろうか。そんな話をしたくて、天球の摂理が音楽という『星界の音楽』(工作舎)を店内奥に面陳しているのだが、手にした人は二人だけだった。定有堂教室「シネクラブ」の講師だった福野真司さん(もともとそれが専攻)と、旅先で立ち寄った元税関職員

の女性の音楽家だ。

「買うに迫いつく読書なし」(2号)の浜田浩之さんと、かつてユートピアについて論じ合っていた頃があった。宮沢賢治の「ポラーノの広場」をテーマにしていたころだろうか。浜田さんは、皆が自分の理想を主張し合い、しかも争うことがない世界、それがユートピアだといった。…不可能ことだと言ったのだろうか。

個人の書棚と異なり、本屋の棚には多種多様の正義がひしめき合う。閉店後の深夜、書物たちはのしり合っているのだろうか。

そういえば定有堂の「読む会」では、一度もののしり合いの声を耳にしたことがない。ビオトープだからだろうか。多孔性の豊かさのおかげで、ここでは実人生の交錯が何一つない。

ブック・ビオトープというフラジャイルな生態系が、かけがえのない大切なものとして本屋空間に息づく。それを本屋の青空、とよんでみる。ブッキッシュのトポスだ。

2016.9.29

(参考)

水越伸 『メディア・ビオトープ』 紀伊國屋書店 2005

ジョスリン・ゴドウィン 『星界の音楽』 工作舎 1990